

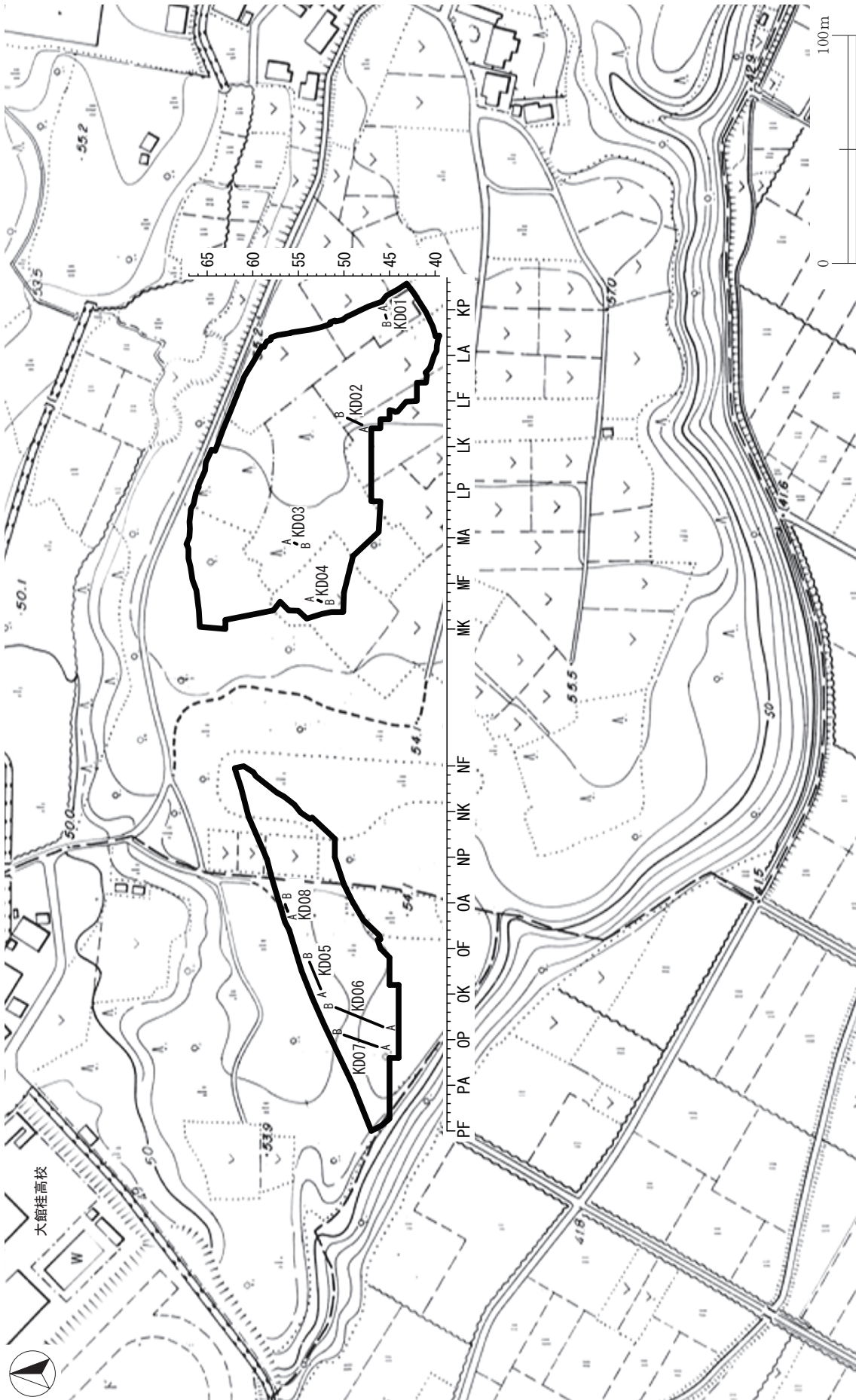
第4章 調査の記録

第1節 基本層序

遺跡の基本土層図は第5図に示す調査区内の8か所（東西両調査区各4か所）で作成した（第6～9図）。

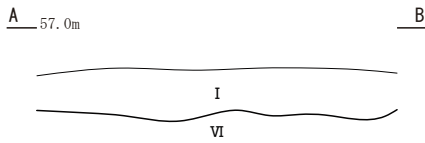
東調査区の基本層序は第Ⅰ～Ⅵ層に分層した。第Ⅰ層は表土である。間隙が多く、草木の根や近年の生活・産業廃棄物が混入している。第Ⅱ層は表土の下の黒ボク土である。僅かにテフラが混入している箇所もあり、耕作・植林による攪乱を受けた層と推定される。第Ⅲ層はテフラが混入する黒ボク土である。テフラは場所によって層厚に差があり、堆積していない部分もある。このテフラは分析により、白頭山苦小牧火山灰（B-Tm）と十和田a火山灰（To-a）が混和したものという結果が出ており（第5章第7節）、第Ⅲ層は火山灰降下後に攪乱されていると判断される。第Ⅳ層は、遺物を包含する黒ボク土である。土層断面で遺構が第Ⅳ層の中位から掘り込まれていることを観察できたため、第Ⅳ層中に生活面があるものと推定し、上位を第Ⅳa層、下位を第Ⅳb層としたが、調査区全体で明確に分層することは困難だった。第Ⅴ層は第Ⅳ層と第Ⅵ層との漸移層で、極めて僅かであるが遺物を包含している。第Ⅵ層は十和田八戸火砕流堆積物（地山）である。ほとんどの遺構が第Ⅴ・Ⅵ層で確認された。東調査区の東側では、第Ⅱ～Ⅴ層が削平され、第Ⅰ層直下に第Ⅵ層が確認される場所もあった。

西調査区の基本層序は基本的に東調査区と対応するが、以下の点で相違がある。第Ⅲ層は攪乱されていない火山灰層で、極めて薄い黒ボク土層を境に第Ⅲa層、第Ⅲb層の2層に分けることができる（巻頭図版3-2）。テフラ分析により、第Ⅲa層は白頭山苦小牧火山灰、第Ⅲb層は十和田a火山灰という結果が出ており、これは本遺跡の1997（平成9）年調査区の分析結果とも一致する。次に、西調査区の旧地形は、浅い沢状の窪地が複雑に入り組んでおり、それを覆う第Ⅳ・Ⅴ層がグライ化しているため東調査区より細かく分層される。花粉分析、珪藻分析、プラント・オパール分析の結果、第Ⅳ層の堆積当時は湿性が高いが常に水がついている状況ではなかったと判断される（第5章第5節）。第Ⅳ層は遺構から生活面が推定される場合はそれを境として上を第Ⅳa層としているが、生活面が確認できない場合は上から順にⅣa、Ⅳb、Ⅳc…としているため、西調査区の基本土層図間で必ずしも対応していない。東調査区同様、第Ⅳ層は遺物を包含し、第Ⅴ層も僅かであるが遺物を包含している。第Ⅵ層は十和田八戸火砕流堆積物（地山）であり、出土した炭化材の¹⁴C年代測定により、1万3千年前前後のものという分析結果が出ている（第5章第1節）。深掘りの結果、1m以上の層厚があることが確認された。



第5図 遺跡周辺地形図・基本土層断面位置図

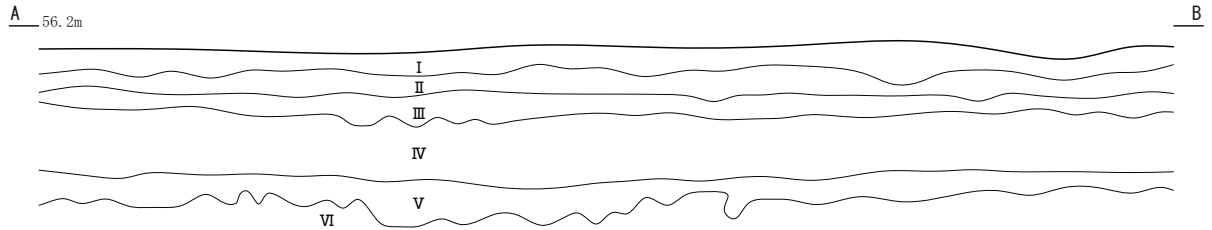
基本土層 1 (KD01)



基本土層 1 (KD01 SPA-B)

- 第I層 暗赤褐色土(2.5YR3/2) シルト しまり中 粘性中
地山土塊 φ 1~30mm 3% 火山灰 φ 1~5mm 1% 表土
- 第VI層 黄褐色土(10YR5/6) 粘土 しまり強 粘性中 地山

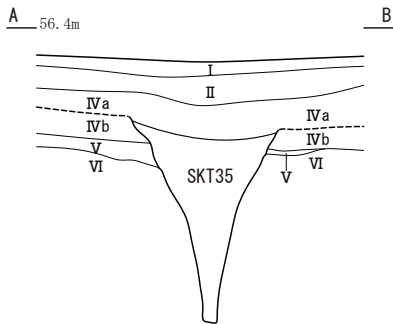
基本土層 2 (KD02)



基本土層 2 (KD02 SPA-B)

- 第I層 黒褐色土(10YR3/1) シルト しまり中 粘性弱 火山灰 φ 1~5mm 1% 表土 植物根が多い
- 第II層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性中 火山灰 φ 1~5mm 3% 黒ボク土を主体とする旧耕作土
- 第III層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり弱 粘性中 火山灰 φ 1~5mm 30% 火山灰は二次堆積
- 第IV層 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり中 粘性中
- 第V層 灰黄褐色土(10YR4/2) シルト しまり強 粘性中
- 第VI層 黄褐色土(10YR5/6) 粘土 しまり強 粘性中 地山

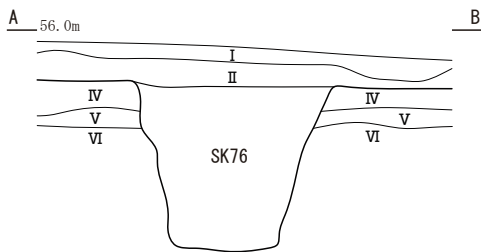
基本土層 3 (KD03)



基本土層 3 (KD03 SPA-B)

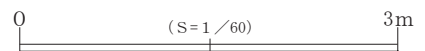
- 第I層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり弱 粘性中 耕作土 植物根が多い
- 第II層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性中 火山灰 φ 1~5mm 3%
黒ボク土を主体とする旧耕作土
- 第IV a 層 黒褐色土(2.5Y3/1) シルト しまり中 粘性中
第IV b層との境目をSKT35の覆土から推定
- 第IV b 層 黒褐色土(2.5Y3/1) シルト しまり中 粘性中
- 第V層 褐色土(10YR4/4) 砂質シルト しまり中 粘性強
- 第VI層 黄褐色土(10YR5/6) 砂質シルト しまり強 粘性中 地山

基本土層 4 (KD04)



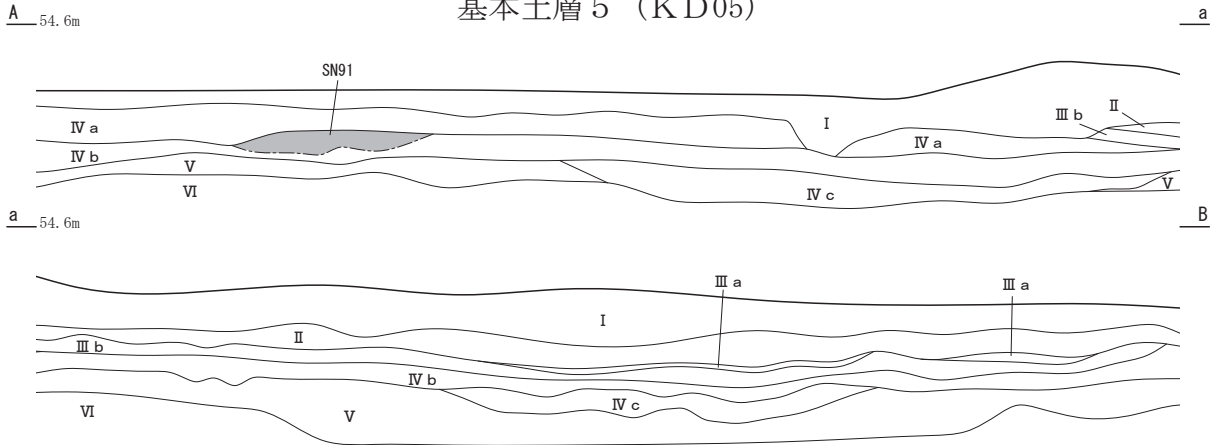
基本土層 4 (KD04 SPA-B)

- 第I層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり弱 粘性中 耕作土
植物根が多い
- 第II層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性中
火山灰 φ 1~5mm 3% 黒ボク土を主体とする旧耕作土
- 第IV層 黒褐色土(2.5Y3/1) シルト しまり中 粘性中
- 第V層 褐色土(10YR4/4) 砂質シルト しまり中 粘性強
第VI層との境には凹凸がある
- 第VI層 黄褐色土(10YR5/6) 砂質シルト しまり強 粘性中 地山



第6図 基本土層 (1)

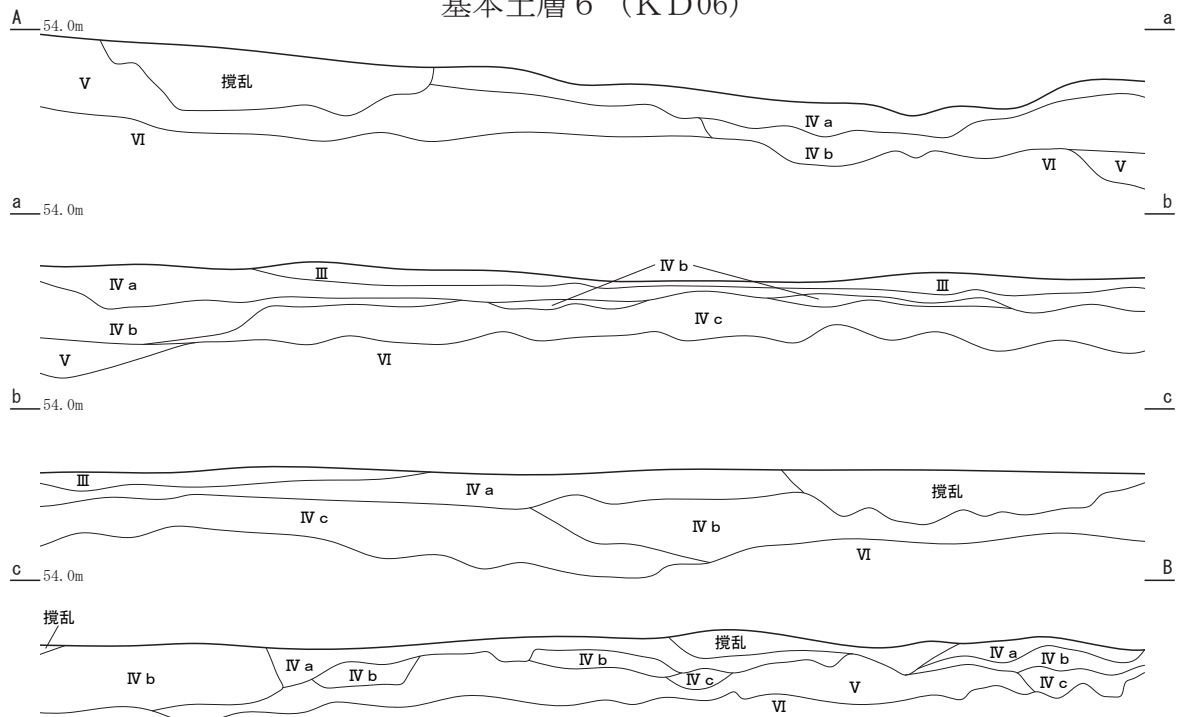
基本土層 5 (KD05)



基本土層 5 (KD05 SPA-B)

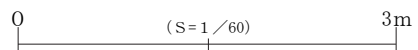
- 第I層 極暗褐色土(7.5YR2/3) シルト しまり弱 粘性弱 地山土φ5~30mm 1% 表土 ゴミが混入 植物根が多い
- 第II層 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり強 粘性中 火山灰φ1~10mm 5%
- 第III a層 黄褐色土(2.5Y5/3) 砂 しまり中 粘性弱 窪みに流入した火山灰(B-Tm)で塊状の堆積 第III b層より細粒
第III b層との境にごく薄い黒ボク土の層が入る
- 第III b層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂 しまり強 粘性弱 流入した火山灰(To-a) 第III a層より粗粒
- 第IV a層 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり強 粘性中 火山灰の第III層下の黒ボク土
SN91の検出面から第IV b層との境目を推定
- 第IV b層 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり強 粘性中 火山灰の第III層下の黒ボク土層
- 第IV c層 灰黄褐色土(10YR4/2) 粘土 しまり強 粘性強 窪地に見られる、グライ化した第IV層
- 第V層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂質シルト しまり強 粘性中 窪地にレンズ状に堆積
- 第VI層 にぶい黄色土(2.5Y6/4) 砂 しまり強 粘性弱 地山 東調査区の地山土より砂質

基本土層 6 (KD06)



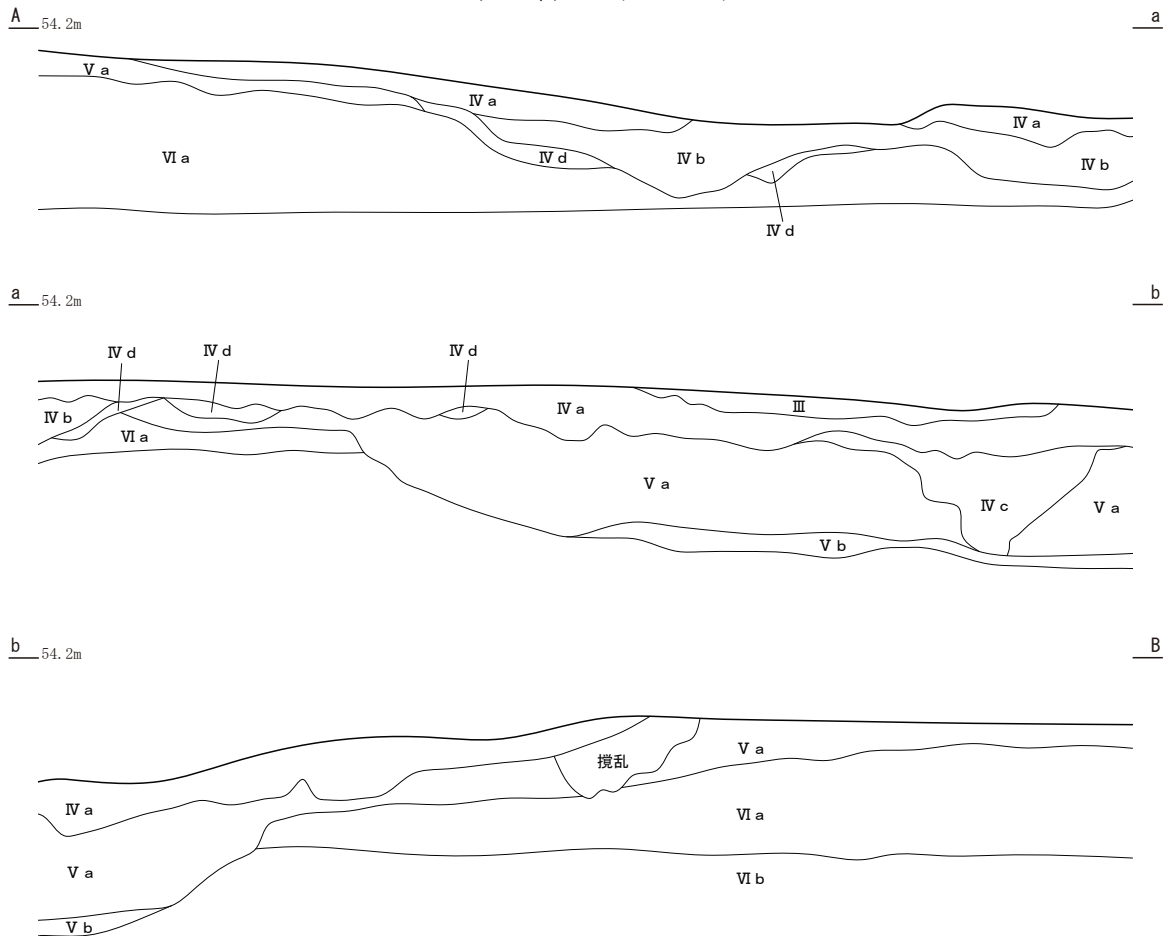
基本土層 6 (KD06 SPA-B)

- 第III層 明黄褐色土(10YR7/6) 砂 しまり中 粘性弱 火山灰 黒ボク土φ1~5mm 3%
- 第IV a層 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 粘性弱
- 第IV b層 褐灰色土(10YR4/1) 砂質シルト しまり中 粘性中
- 第IV c層 黄褐色土(10YR5/6) 粘土 しまり中 粘性強 第IV b層φ1~5mm 3% 礫φ1~50mm 10%
- 第V層 灰褐色土(7.5YR4/2) シルト しまり中 粘性中 礫φ1~30mm 5%
- 第VI層 明黄褐色土(10YR6/6) 礫砂 しまり強 粘性弱 地山



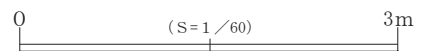
第7図 基本土層(2)

基本土層 7 (KD07)



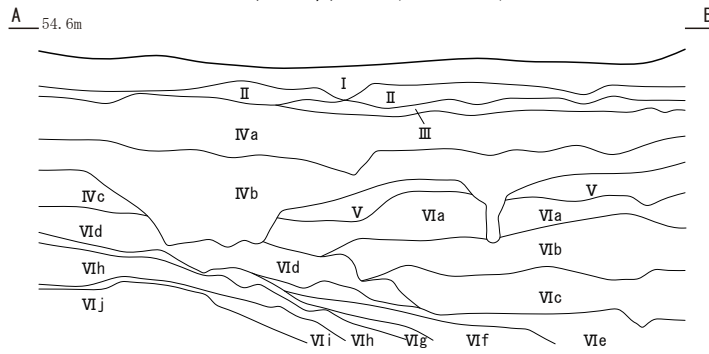
基本土層 7 (KD07 SPA-B)

- 第Ⅲ層 にごい黄色土(2.5Y6/4) 砂 しまり中 粘性弱 火山灰 黒ボク土φ 5~30mm10%
- 第Ⅳ a 層 黒褐色土(10YR3/1) シルト しまり中 粘性中 KD03の第Ⅳ a・Ⅳ b層に対応
- 第Ⅳ b 層 にごい黄褐色土(10YR5/4) 砂質シルト しまり中 粘性弱 植物根がやや入る
SN88の第Ⅳ c層に対応する、ややグライ化した第Ⅳ層
- 第Ⅳ c 層 灰オリーブ色土(5Y5/2) 粘土 しまり強 粘性強 炭化物φ 1~5mm 1%
窪地に見られる、グライ化した第Ⅳ層
- 第Ⅳ d 層 橙色土(7.5YR6/8) 粘土 しまり強 粘性強 基本的に第Ⅳ c層と同じだが、鉄分が多く橙に変色する
- 第Ⅴ a 層 にごい黄褐色土(10YR5/3) 砂質シルト しまり強 粘性弱 地山土塊φ 1~10mm20%
窪地に見られる、僅かにグライ化した第Ⅴ層
- 第Ⅴ b 層 灰オリーブ色土(5Y5/2) 礫砂 しまり強 粘性弱 窪地の底面の水成砂利層
- 第Ⅵ a 層 明褐色土(7.5YR5/8) 粘土 しまり強 粘性強 地山
- 第Ⅵ b 層 にごい黄褐色土(10YR5/4) 砂 しまり強 粘性弱 地山



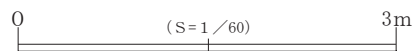
第8図 基本土層 (3)

基本土層 8 (KD08)

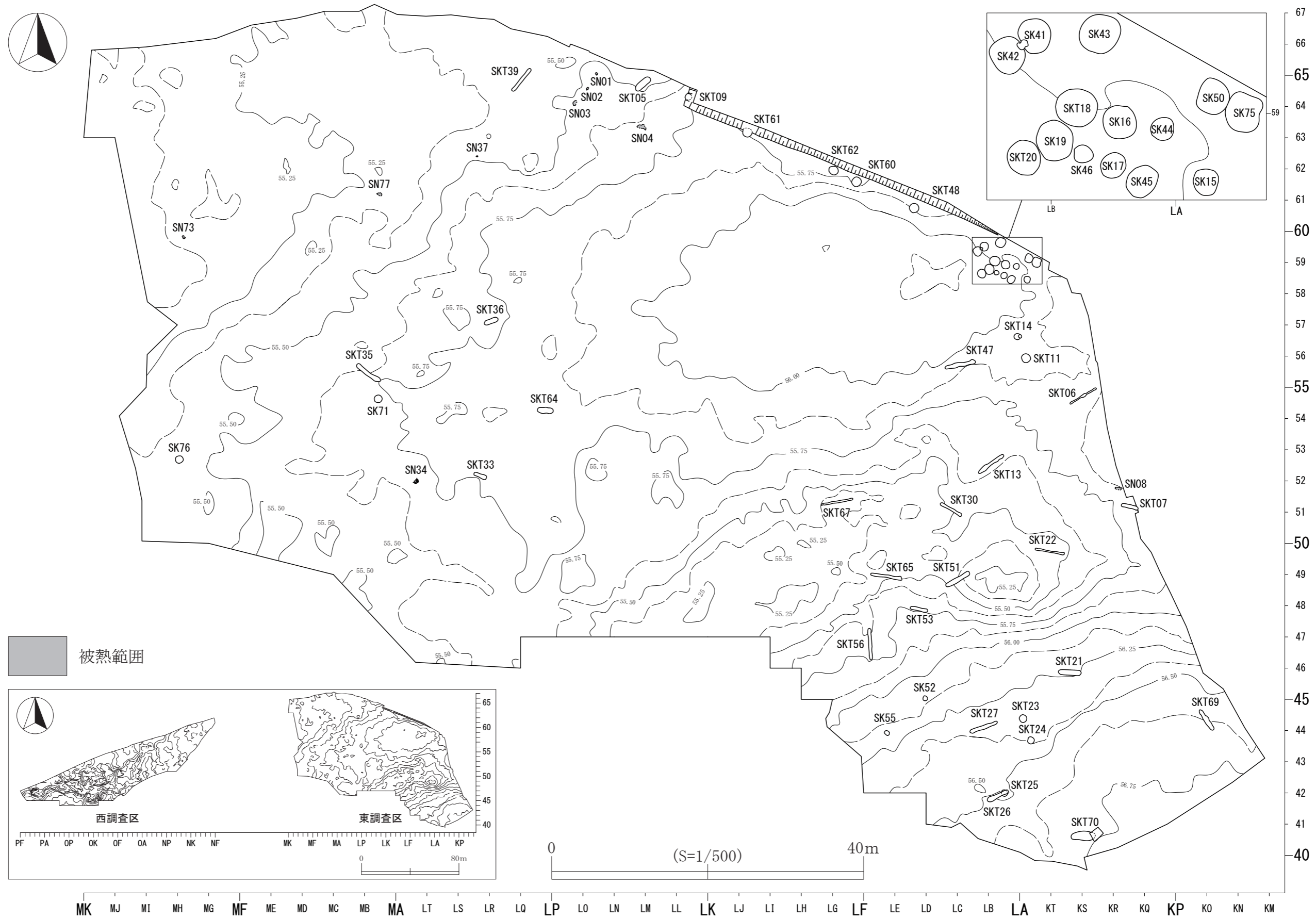


基本土層 8 (KD08 SPA-B)

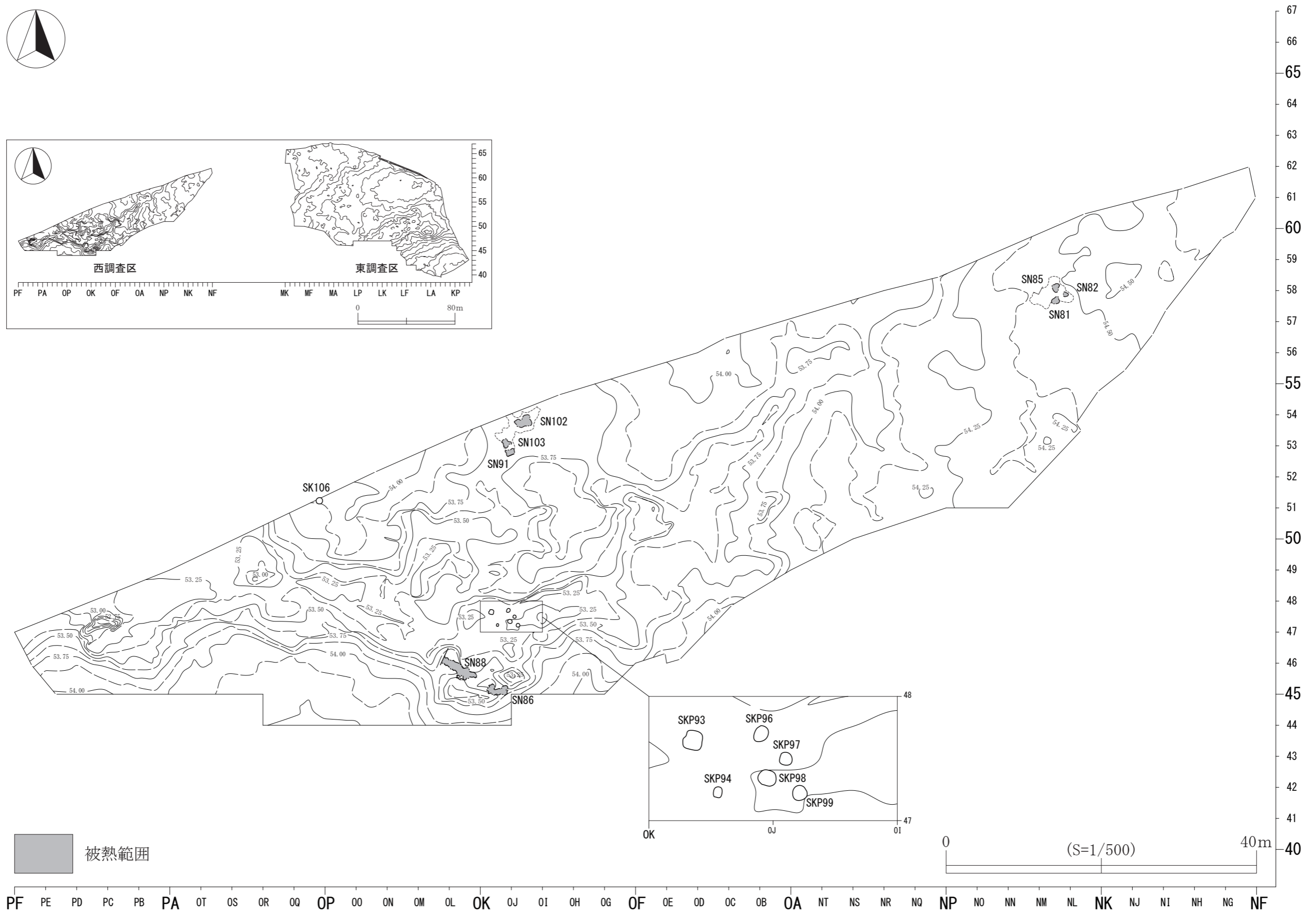
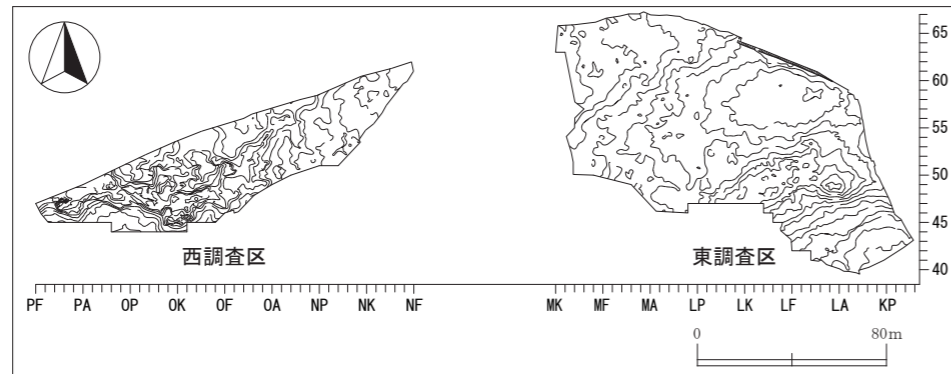
- 第I層 暗褐色土(10YR3/3) シルト しまり弱 粘性弱 火山灰φ1mm1% ゴミが混入 表土
- 第II層 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり中 粘性中 火山灰φ1mm3%
- 第III層 にぶい黄色土(2.5Y6/4) 砂 しまり中 粘性弱 黒ボク土φ5~30mm20% 粗粒の火山灰
- 第IVa層 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり中 粘性中 第IVb層との境は漸移的に変化
- 第IVb層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 粘土 しまり強 粘性強 地山土塊φ5~50mm3%
混入物が多い 窪地に見られる、グライ化した粘土質の第IV層
- 第IVc層 灰黄褐色土(10YR5/2) 粘土 しまり強 粘性強 地山土塊φ5~50mm20% 混入物が特に多い
窪地に見られる、グライ化した粘土質の第IV層
- 第V層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 砂 しまり強 粘性弱 礫φ1~10mm3%
- 第VIa層 明褐色土(7.5YR5/8) 砂 しまり強 粘性弱 礫φ1~10mm5% 地山
赤味の強い砂の層
- 第VIb層 にぶい黄橙色土(10YR6/4) 砂 しまり強 粘性弱 火山灰塊φ10~50mm5%
十和田八戸火砕流(地山土) 青白い砂の層
- 第VIc層 明黄褐色土(10YR6/6) 砂 しまり中 粘性中 火山灰塊φ1~10mm40%
十和田八戸火砕流(地山土) 小さな火山灰塊が多量に混入
- 第VI d層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂質シルト しまり強 粘性弱 地山
火山灰塊φ10~100mm50% 大きな火山灰塊が多量に混入
- 第VI e層 にぶい黄色土(2.5Y6/3) 粘土 しまり中 粘性中 地山
白い粘土の薄い層
- 第VI f層 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 砂質シルト しまり中 粘性中 地山
火山灰塊φ1~10mm5% 第VI e層より灰色味の強い層
- 第VI g層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 粘土 しまり中 粘性中 火砕流 地山
第VI e層に類似する層
- 第VI h層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂質シルト しまり強 粘性弱 火山灰塊φ5~50mm30%
地山 第VI d層に類似する層
- 第VI i層 にぶい黄色土(2.5Y6/3) 粘土 しまり中 粘性中 地山
第VI e層に類似する層
- 第VI j層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂 しまり中 粘性弱 火山灰塊φ1~10mm3%
地山 火山灰塊が少量混入する砂の層



第9図 基本土層(4)



第 10 図 遺構配置図 (東調査区)



第11図 遺構配置図(西調査区)

第2節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、根下戸道下遺跡で検出した遺構は、土坑17基、陥し穴34基、焼土遺構17基、柱穴様ピット6基の計74遺構である。これらの検出遺構のうち、陥し穴は東調査区のみで検出され、比較的規模の大きな焼土遺構は西調査区で検出された。遺構内出土遺物は極めて少量で、縄文土器30点、スクレーパー1点、碎片5点である。以下、調査区ごとに記述する。

1 東調査区

東調査区では、土坑16基、陥し穴34基、焼土遺構8基を検出した。

(1) 土坑

土坑は16基検出した。そのうちSK15～17、SK19、SK41～45、SK50、SK55、SK75の12基は調査区北東端の芋掘沢の沢筋に連なった緩斜面に集中しており、ほぼ同じ標高で確認された。このうち、SK17、SK45、SK75の3基は出土遺物から縄文時代早期中葉から前期初頭に帰属するものと推定できる。他の9基も近接する分布状況からほぼ同時期に属する可能性が考えられる。残りの4基は調査区南西側及び南東側にそれぞれ散在し、帰属時期は不明である。

SK15【第12図（48頁）】

《位置・確認》KT58グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.970mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径0.90m、短径0.84mの略円形で、確認面からの深さは0.10mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》地山土粒を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SK16【第12図（48頁）】

《位置・確認》LA58・59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.983mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径1.14m、短径1.10mの略円形で、確認面からの深さは0.17mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》2層に分層した。1・2層は第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SK17【第13図（49頁）／図版3・10】

《位置・確認》LA58グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は56.051mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径0.87m、短径0.76mの略円形で、確認面からの深さは0.18mである。

《底面・壁》底面は中央部が凸レンズ状に盛り上がる。周壁は緩やかに立ち上がり、開口部に向かって外傾する。

《覆土》2層に分層した。1層は多量の焼土粒と少量の炭化物を均一に含む人為堆積土、2層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》縄文土器片13点が1層から出土し、深鉢形土器の同一個体破片と考えられる。第38図1（74頁）は胴部で、地文は0段多条のLR原体の斜位回転による縦走縄文である。胎土は多量の繊維と粗砂粒、細砂粒を含み、内面は指ナデによって横位に調整されている。第38図2（74頁）は口端部が欠損しているが、口縁部文様帯付近～胴部で、地文の上に2条の平行沈線が横位に施文されている。上記の土器は、類例として青森県表館(1)遺跡出土の第X群土器が挙げられ、縄文時代早期末葉に帰属すると推定される。^(註1)

S K19【第13図（49頁）】

《位置・確認》LA・LB58グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は56.003mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径1.30m、短径1.20mの略円形で、確認面からの深さは0.25mである。

《底面・壁》底面は若干起伏があるがほぼ平坦で、周壁は外傾して立ち上がる。

《覆土》地山土粒を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K41【第13図（49頁）】

《位置・確認》LB59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.948mである。

《重複》SK42と隣接する。当該部分が攪乱されているため、切り合いの有無等詳細は不明である。

《規模・平面形》長径1.13m、短径0.97mの略円形で、確認面からの深さは0.19mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》地山土粒を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K42【第13図（49頁）】

《位置・確認》LB59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は56.013mである。

《重複》SK41と隣接する。当該部分が攪乱されているため、切り合いの有無等詳細は不明である。

《規模・平面形》長径1.18m、短径1.10mの略円形で、確認面からの深さは0.18mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》2層に分層した。1層は焼土粒・地山土粒を、2層は地山土粒・礫を少量含む。第

IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SK43【第13図（49頁）】

《位置・確認》LA59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.893mである。北東側の一部が、調査区に隣接する土地の造成のため攪乱されている。

《重複》なし。

《規模・平面形》削平されていない底面と壁の形状から推定すると長径1.36m、短径1.24mの略円形で、確認面からの深さは0.38mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁は垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。

《覆土》5層に分層した。1～4層は地山土粒を少量、5層は地山土粒・礫を少量含む。第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SK44【第14図（50頁）】

《位置・確認》LB59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.998mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径0.79m、短径0.73mの略円形で、確認面からの深さは0.12mである。

《底面・壁》底面はほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》地山土粒を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SK45【第14図（50頁）／図版3・10】

《位置・確認》LA58グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.053mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径1.07m、短径0.89mの略円形で、深さは0.42mである。

《底面・壁》底面は中央部が凸レンズ状に若干の盛り上がりがあるが、ほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。

《覆土》5層に分層した。1・3層は地山土粒・砂粒を少量、5層は地山土粒・礫を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2・4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》縄文土器片11点と頁岩の碎片1点が1層、炭化したクルミ1個が5層から出土した。土器片は3個体の深鉢形土器と考えられる。第38図3（74頁）は口端部が欠損しているが、口縁部文様帯付近～胴部で、地文の上に2条の平行沈線が横位に施文されている。地文は0段多条のLR原体の斜位回転による縦走縄文である。胎土は多量の繊維と粗砂粒、細砂粒を含み、内面は指ナデによって横位に調整されている。外面に煤状炭化物が付着している。第38図4（74頁）は僅かに外反する口縁部である。無文地に2条の平行沈線文を横位に、その下位に幾何学的な沈線文を施されている。口唇部には刻み目文がある。胎土は多量の繊維と粗砂粒が混入され、内面は指ナデによって横位

に調整されている。外面に煤状炭化物が付着している。上記の2個体は、SK17出土の土器片と同一型式で縄文時代早期末葉に帰属すると推定される。第38図5（74頁）は胴部と考えられ、LR原体の横位回転による縄文が施されている。胎土は繊維と多量の細砂粒を含み、内面は指ナデによって横位に調整されている。縄文時代前期初頭に帰属すると推定される。

S K 46【第14図（50頁）】

《位置・確認》LA58グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は56.005mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径0.65m、短径0.58mの略円形で、確認面からの深さは0.18mである。

《底面・壁》底面は中華鍋状で、周壁は西側がやや外傾し、東側が緩やかに立ち上がる。

《覆土》地山土粒・礫を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K 50【第14図（50頁）】

《位置・確認》KT58・59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.893mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径1.19m、短径1.00mの略円形で、確認面からの深さは0.17mである。

《底面・壁》底面は中央が窪んでいるがほぼ平坦で、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》炭化物・礫を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K 75【第14図（50頁）／図版10】

《位置・確認》KT58・59グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.868mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径1.32m、短径1.22mの略円形で、確認面からの深さは0.17mである。

《底面・壁》底面は小さな起伏が多く、周壁は緩やかに立ち上がる。

《覆土》地山土粒を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》縄文土器片が2点出土した。第38図6（74頁）は深鉢形土器の口縁部で、各2条の横位の平行沈線文間に斜位の沈線文を充填し、その下位に縦位の貝殻復縁文を施している。口唇部には刻み目文がある。胎土は繊維と多量の細砂粒が混入され、内面は指ナデによって横位に調整されている。他の1点は1cm四方の小破片に貝殻復縁文が施されており、同一個体と考えられる。上記の土器は、寺の沢式土器と併行すると推定され、縄文時代早期中葉に帰属すると考えられる。

S K 52【第15図（51頁）】

《位置・確認》LC44・45、LD44・45グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、

第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.084mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》長径0.65m、短径0.60mの略円形で、確認面からの深さは0.18mである。

《底 面 ・ 壁》底面は中華鍋状で、周壁は外傾する。

《覆 土》地山土粒を少量含む単層で、第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

S K 55【第15図（51頁）】

《位 置・確 認》LE43グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.174mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》長径0.68m、短径0.52mの楕円形で、確認面からの深さは0.18mである。

《底 面 ・ 壁》底面は若干の起伏があるがほぼ平坦で、周壁は開口部に向かって外傾する。

《覆 土》地山土塊を均一に含む単層で、埋め戻しによる人為堆積土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

S K 71【第15図（51頁）】

《位 置・確 認》MA54グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.710mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》長径1.02m、短径0.98mの略円形で、確認面からの深さは0.44mである。

《底 面 ・ 壁》底面はほぼ平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。

《覆 土》2層に分層した。1層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2層は地山土塊を多量含む壁面の崩落土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

S K 76【第15図（51頁）】

《位 置・確 認》MG・MH52グリッドに位置する。確認調査で検出し、土層断面で第IV層上位からの掘り込みが観察された。平面は第V層下位で確認した。確認面の標高は55.458mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》長径1.00m、短径0.97mの略円形で、確認面からの深さは0.66mである。

《底 面 ・ 壁》底面はほぼ平坦で、周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。

《覆 土》5層に分層した。1・2層は地山土粒を少量、3～5層は地山土粒を多量に含む。

底面中央に向かって傾斜する堆積状況を呈し、基本的に第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

(2) 陥し穴

陥し穴は34基検出した。開口部の平面形状から、円形… 12基、長楕円形… 4基（長軸の長さが2.5m未満で長軸と短軸比が3：1前後のもの）、溝状… 18基（長軸の長さが2.5m以上のもの）、以上の3種類に分類した。円形については土坑との分類基準として底面に逆茂木の痕跡と考えられる杭穴が確認できるものとした。また、長楕円形の4基すべては長軸方向の断面が逆台形であり、そのうちの1基からは逆茂木の痕跡と考えられる杭穴が確認できた。

陥し穴は明確な帰属時期を明らかにしえないが、本遺跡の円形SKT25が溝状SKT26に切られていることから円形SKT25が古いことは判明している。円形は底部の杭穴が共通に確認されており、規模・平面形が類似し、一定の間隔で点在することから、ほぼ同時期に構築されたものと推察される。

SKT09（円形）【第16図（52頁）／図版2】

《位置・確認》LK64グリッドに位置する。調査区の東側に隣接する土地の造成によって削平され、断面の一部が露出していたため確認した。平面は第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.641mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》削平されていない底面と壁の形状から推定すると、開口部は径1.04mの略円形で、確認面からの深さは0.88mである。底部は長径0.68m、短径0.64mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。杭穴は底面中央部の位置にあり、径0.12mの円形で、深さ0.20m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がっている。

《覆土》15層に分層した。2・8・15層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、1・3・4・7・10～13層は地山土粒・礫を少量含む第IV層由来の自然堆積土、5・6・9・14層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を少量含む黒褐色土である。

《出土遺物》なし。

SKT11（円形）【第16図（52頁）／図版2・3・9】

《位置・確認》KT55・56グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.949mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径1.16m、短径1.12mの略円形で、確認面からの深さは0.80mである。底部は長径0.74m、短径0.68mの略円形である。

《底面・壁》底面は僅かに低い中央部に向かって緩やかに傾斜する。周壁はほぼ垂直に中位まで立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。杭穴は底面中央部の位置にあり、長径0.07m、短径0.04mの楕円形で、深さ0.20m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》6層に分層した。1～4層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、5・6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を少量含む黒褐色土であ

る。

《出土遺物》なし。

S K T 14 (円形)【第17図 (53頁) / 図版 2】

《位置・確認》KT・LA56グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.914mである。開口部東側の一部が攪乱されている。

《重複》なし。

《規模・平面形》削平されていない底面と壁の形状から推定すると、開口部は長径0.82m、短径0.78mの略円形で、確認面からの深さは0.70mである。底部は長径0.64m、短径0.60mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に中位まで立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。杭穴は底面中央部の位置にあり、長径0.15m、短径0.10mの略円形で、深さ0.32m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》4層に分層した。1～3層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む黒褐色土である。

《出土遺物》なし。

S K T 18 (円形)【第17図 (53頁) / 図版 2・4・10】

《位置・確認》LA58・59グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.946mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径1.32m、短径1.20mの楕円形で、確認面からの深さは1.12mである。底部は長径0.80m、短径0.72mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近でやや外傾する。杭穴は底面中央部からやや南西方向の位置にあり、長径0.20m、短径0.14mの楕円形で、深さ0.40m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》7層に分層した。1層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2・3・5・7層は地山土塊をほぼ均一に含む埋め戻しによる人為堆積土、4・6層は地山土塊を主体とする壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む黒褐色土である。

《出土遺物》縄文土器片3点が1層下位から出土した。深鉢形土器の胴部と考えられる。第38図7(74頁)はLR原体の横位回転による縄文が施されている。胎土は多量の繊維と細砂粒が混入され、内面は指ナデによって横位に調整されている。縄文時代前期初頭に帰属すると推定される。

S K T 20 (円形)【第17図 (53頁) / 図版 2・4】

《位置・確認》LB58グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は56.035mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径1.14m、短径1.04mの略円形で、確認面からの深さは1.02mである。底部は長径0.82m、短径0.76mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に中位まで立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。杭穴は底面中央部の位置にあり、長径0.14m、短径0.13mの略円形で、深さ0.32m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》6層に分層した。1・2層は根の混入が多く地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、5層は地山土粒を多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、3・4・6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を少量含む暗褐色土である。

《出土遺物》なし。

S K T 23 (円形)【第18図 (54頁) / 図版4・5】

《位置・確認》KT・LA44グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.291mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径0.98m、短径0.96mの略円形で、確認面からの深さは1.12mである。底部は長径0.84m、短径0.78mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁は中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。杭穴は底面中央部からやや北東の位置にあり、長径0.12m、短径0.10mの略円形で、深さ0.34m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》5層に分層した。1・2・5層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、3・4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む黒褐色土である。

《出土遺物》なし。

S K T 24 (円形)【第18図 (54頁) / 図版5】

《位置・確認》KT43グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.354mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径0.94m、短径0.92mの略円形で、確認面からの深さは0.80mである。底部は長径0.77m、短径0.72mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。杭穴は底面中央部からやや北東の位置にあり、長径0.15m、短径0.14mの略円形で、深さ0.42m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》4層に分層した。1層は地山土粒を少量、4層は多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、2層は地山土塊を少量、3層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む黒色土である。

《出土遺物》なし。

SKT25 (円形)【第19図 (55頁) / 図版5・6】

《位置・確認》LA41・42グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.461mである。

《重複》溝状の陥し穴SKT26に切られる。

《規模・平面形》開口部は長径0.86m、短径0.78mの略円形で、確認面からの深さは1.04mである。底部は長径0.68m、短径0.66mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦でグライ化している。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。杭穴は底面中央部からやや南東の位置にあり、長径0.11m、短径0.10mの略円形で、深さ0.50m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》5層に分層した。1・5層は地山土粒を少量、2層は多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、3・4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む黒色土である。

《出土遺物》なし。

SKT48 (円形)【第19図 (55頁) / 図版2】

《位置・確認》LD60グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.834mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径1.22m、短径1.18mの略円形で、確認面からの深さは0.90mである。底部は長径0.77m、短径0.66mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はやや外傾して立ち上がり、開口部に向かっている。杭穴は底面中央部からやや北側の位置にあり、径0.16mの円形で、深さ0.26m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》7層に分層した。1層は地山土粒を少量、2・6層は地山土粒を多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、3～5・7層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を少量含む暗褐色土である。

《出土遺物》なし。

SKT60 (円形)【第19図 (55頁) / 図版2】

《位置・確認》LF60グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.719mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径1.27m、短径1.26mの略円形で、確認面からの深さは0.90mである。底部は長径0.94m、短径0.90mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かって外傾している。杭穴は底面中央部からやや東側の位置にあり、長径0.18m、短径0.14mの楕円形で、深さ0.18m、周壁は杭穴底面からほぼ垂直に立ち上がる。

《覆土》7層に分層した。1層は地山土粒・礫を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2～7層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む暗褐色土で

ある。

《出土遺物》なし。

SKT61 (円形)【第20図 (56頁) / 図版2】

《位置・確認》LI63グリッドに位置する。調査区の北側に隣接する土地の造成によって削平され、断面の一部が露出していたため確認した。平面は第V層下位で確認した。確認面の標高は55.757mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》削平されていない底面と壁の形状から推定すると、開口部は長径1.20m、短径1.12mの略円形で、確認面からの深さは1.10mである。底部は長径0.72m、短径0.68mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁は中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。杭穴は底面中央部の位置にあり、径0.18mの円形で、深さ0.30m、周壁は杭穴底面から北西側がほぼ垂直に、他はやや外傾し、立ち上がる。

《覆土》7層に分層した。1・3・5・7層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2・4・6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土塊を多量に含む黒褐色土である。

《出土遺物》なし。

SKT62 (円形)【第20図 (56頁) / 図版2・10】

《位置・確認》LF61・62、LG61・62グリッドに位置する。第V層は調査区境界の工事用法面によって削平されたため、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.695mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長径1.24m、短径1.08mの略円形で、確認面からの深さは1.00mである。底部は長径0.72m、短径0.68mの略円形である。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。周壁は中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。杭穴は底面中央部からやや東方向の位置にあり、長径0.20m、短径0.14mの略円形で、深さ0.28m、周壁は杭穴底面からやや外傾し、立ち上がる。

《覆土》8層に分層した。1～3層は地山土粒を少量、8層は地山土粒を多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、4～7層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土は地山土粒を多量に含む暗褐色土である。

《出土遺物》縄文土器片1点が1層から出土した。第38図8 (74頁)は深鉢形土器の口唇部が僅かに残る口縁部と見られ、LRL複節原体の横位回転により縄文が施されている。口縁上位がやや外反する。胎土は多量の繊維と細砂粒が混入され、内面は指ナデによって横位に調整されている。

SKT05 (長楕円形)【第21図 (57頁) / 図版6】

《位置・確認》LL・LM64グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.467mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸2.36m、短軸0.86m、確認面からの深さ1.26mである。底部は長軸1.98m、短軸0.38mである。長軸方向はN-50° - Eで、等高線に直交する。

《底 面 ・ 壁》底面は長軸方向の両端部がやや高く、中央部に小さな起伏がある。壁は長軸方向の両端がほぼ垂直に立ち上がり、北西端が中位から開口部に向かってやや外傾する。また、短軸方向の両端は中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。逆茂木と考えられる杭穴は長軸方向にほぼ等間隔で1列に並び、南西側からP1～P4の順で設置されている。その平面形はP1は長径0.11m、短径0.10mの不整な円形で深さ0.18m、P2は長径0.13m、短径0.09mの楕円形で深さ0.21m、P3は長径0.14m、短径0.08mの不整な楕円形で深さ0.26m、P4が長径0.16m、短径0.12mの不整な楕円形で深さ0.38mである。周壁はP1～P4とも概ね杭穴底面からやや外傾し、立ち上がる。

《覆 土》12層に分層した。1・12層は礫・粗砂を少量、3・11層は礫を多量、6層は地山土粒を少量、5・8層は地山土粒を多量に含むレンズ状や水平に堆積する第IV層由来の自然堆積土、10層は地山土塊を少量、2・4・7・9層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。杭穴覆土はP1が地山粒を多量に含む黒色土、P2・P4は地山由来のにぶい黄褐色土、P3は地山由来の灰黄褐色土である。

《出 土 遺 物》なし。

S K T 33 (長楕円形)【第21図 (57頁) / 図版6】

《位 置 ・ 確 認》LR52グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.765mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸1.68m、短軸0.60m、確認面からの深さ0.93mである。底部は長軸1.46m、短軸0.21mである。長軸方向はN-79° - Wで、等高線に平行する。

《底 面 ・ 壁》底面は中央部より北西端側に緩やかな窪みがあり、南東端側はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がほぼ垂直に立ち上がり、東端の中位から開口部に向かってやや外傾する。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆 土》3層に分層した。1層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、2・3層は地山土塊・礫を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

S K T 36 (長楕円形)【第22図 (57頁) / 図版9】

《位 置 ・ 確 認》LQ・LR57グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第VI層上位まで掘り下げられていた。確認面の標高は55.695mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸1.84m、短軸0.96m、確認面からの深さ0.81mである。底部は長軸1.35m、短軸0.62mである。長軸方向はN-79° - Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がやや外傾して立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向では両端が中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆土》6層に分層した。1・3・5層は地山粒を少量、2・4層は地山土粒を多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SKT64 (長楕円形)【第22図 (58頁)】

《位置・確認》L0・LP54グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.750mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸2.04m、短軸0.56m、確認面からの深さ0.85mである。底部は長軸1.56m、短軸0.18mである。長軸方向はN-84°-Wで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端が外傾し、開口部に向かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆土》5層に分層した。1・4層は地山土粒を少量含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、2・3・5層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SKT06 (溝状)【第23図 (59頁) / 図版2】

《位置・確認》KR・KS54グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.773mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.91m、短軸0.35m、確認面からの深さ0.90mである。底部は長軸3.92m、短軸0.10mである。長軸方向はN-59°-Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面は起伏が少なく僅かに北東端が高く、緩やかに南西端に傾斜する。壁は長軸方向の南西端が僅かにオーバーハングしているが、両端ともほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向ではやや外傾し立ち上がる。

《覆土》4層に分層した。1・3・4層は地山土粒を少量、2層は地山土粒を多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SKT07 (溝状)【第23図 (59頁) / 図版2・7】

《位置・確認》KQ51グリッドに位置する。北東端が調査区境界であったが、根下戸Ⅲ遺跡(2000年調査)で検出された陥し穴(SK12)と同一遺構であることが分かった。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.808mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸2.00m、短軸0.50m、確認面からの深さ0.92mである。底部は長軸2.08m、短軸0.12mである。根下戸Ⅲ遺跡の調査結果と合わせると開口部は長軸約2.54m、底部は長軸約2.96mである。但し、調査区境界付近は工事で一部削平を受け、短くなっていると考えられる。長軸方向はN-78°-Wで、等高線に平行する。

《底 面 ・ 壁》底面は起伏が少ないが長軸方向の両端部がやや高く、中央部に向かって緩やかに傾斜する。壁は長軸方向の北東端がオーバーハングし、中位から開口部に向かってやや外反する。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。

《覆 土》10層に分層した。1・3・5・7層は地山土粒を少量、4層は地山土粒を多量に含むレンズ状に堆積する第Ⅳ層由来の自然堆積土、9層は地山土塊を少量、2・6・8・10層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

S K T 13 (溝状)【第24図 (60頁) / 図版 2・7】

《位 置 ・ 確 認》LA・LB52グリッドに位置する。第Ⅵ層上位で確認した。確認面の標高は55.648mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.94m、短軸0.60m、確認面からの深さ1.08mである。底部は長軸3.98m、短軸0.22mである。長軸方向はN-55°-Eで、等高線に平行する。

《底 面 ・ 壁》底面は硬く締まり、中央部からやや南西側に窪みがあるが、ほぼ平坦である。壁は長軸方向の南西端が僅かにオーバーハングしているが、両端ともほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。

《覆 土》5層に分層した。1・5層は地山土粒を少量、2層は地山土粒を多量に含むレンズ状や水平に堆積する第Ⅳ層由来の自然堆積土、3・4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出 土 遺 物》なし。

S K T 21 (溝状)【第24図 (60頁) / 図版 2・7】

《位 置 ・ 確 認》KR・KS45グリッドに位置する。第Ⅴ層まで削平を受けており、第Ⅰ層直下、第Ⅵ層上位で確認した。確認面の標高は56.221mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸2.90m、短軸0.68m、確認面からの深さ1.37mである。底部は長軸3.70m、短軸0.15mである。長軸方向はN-85°-Wで、等高線に平行する。

《底 面 ・ 壁》底面はほぼ平坦でグライ化する。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、東端はやや内反して開口部に向かい、西端は中位まで内傾し、中位からほぼ垂直に開口部に向かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆 土》6層に分層した。1・4層は地山土粒を少量含む水平やレンズ状に堆積する第Ⅳ層

由来の自然堆積土、2・3・5・6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SKT22（溝状）【第25図（61頁）／図版2・7・8】

《位置・確認》KS・KT49グリッドに位置する。第IV層まで削平を受けており、第V層上位で確認した。確認面の標高は55.429mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.79m、短軸0.32m、確認面からの深さ0.88mである。底部は長軸3.75m、短軸0.14mである。長軸方向はN-81°-Wで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦でグライ化する。壁は長軸方向の両端がほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆土》4層に分層した。1・2層は地山土粒を少量、3層は地山粒を多量に含む水平に堆積する第IV層由来の自然堆積土、4層は地山土塊を少量含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

SKT26（溝状）【第25図（61頁）／図版2】

《位置・確認》LA41・42、LB41グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.488mである。

《重複》円形の陥し穴SKT25を切る。

《規模・平面形》開口部は長軸2.92m、短軸0.68m、確認面からの深さ1.03mである。底部は長軸3.56m、短軸0.24mである。長軸方向はN-67°-Wで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦でグライ化する。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、中位からほぼ垂直に開口部に向かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。

《覆土》7層に分層した。1・3・4層は地山土粒を少量、7層は多量に含むレンズ状に堆積する第IV層由来の自然堆積土、2層は地山土塊を多量に含む人為堆積土、5・6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。断面A-B1層は、断面C-Dの2層に対応する。

《出土遺物》なし。

SKT27（溝状）【第26図（62頁）／図版2・8】

《位置・確認》LA44、LB43・44グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.346mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.73m、短軸0.60m、確認面からの深さ0.93mである。底部は長軸3.39m、短軸0.12mである。長軸方向はN-71°-Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向

かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆 土》5層に分層した。1・5層は地山粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2～4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 30 (溝状)【第26図 (62頁) / 図版 2】

《位置・確認》LB51・52、LC50・51グリッドに位置し、第V層下位で確認した。確認面の標高は55.500mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.14m、短軸0.42m、確認面からの深さ1.02mである。底部は長軸3.24m、短軸0.26mである。長軸方向はN-59°-Wで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がオーバーハングしているが、ほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向では南西側がほぼ垂直に、北東側がやや外傾し立ち上がり、開口部に向かっている。

《覆 土》7層に分層した。1・7層は地山粒を少量含む、2層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、3～6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 35 (溝状)【第27図 (63頁)】

《位置・確認》MA・MB55グリッドに位置する。確認調査で検出しており、土層断面で第IV層中位からの掘り込みが観察された。平面は第V層下位で確認した。確認面の標高は55.659mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.44m、短軸0.66m、断面の掘り込みが観察できる面からの深さ1.04mである。底部は長軸3.76m、短軸0.22mである。長軸方向はN-56°-Wで、等高線に直交する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、東端はやや内傾して開口部に向かい、西端はほぼ垂直に開口部に向かっている。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆 土》5層に分層した。1・2層は礫を少量含む、5層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、3・4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 39 (溝状)【第27図 (63頁) / 図版12】

《位置・確認》LP64・65、LQ64グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.443mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.66m、短軸0.40m、確認面からの深さ0.58mである。底部は長軸3.40m、短軸0.09mである。長軸方向はN-40°-Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の北東端が外傾して開口部に向かい、南西端は中位まではほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。短軸方向では中位まではほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆土》3層に分層した。1・3層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、2層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》石器1点が1層から出土した。第41図1（77頁）はサイドスクレーパーで末端部が折損している。両側縁に連続的な調整剥離を施している。

S K T 47（溝状）【第28図（64頁）／図版2・8】

《位置・確認》LB・LC55グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.909mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.96m、短軸0.60m、確認面からの深さ1.06mである。底部は長軸4.46m、短軸0.20mである。長軸方向はN-79°-Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、開口部に向かってやや内傾する。短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かって外傾する。

《覆土》5層に分層した。1・4・6層は地山粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2・3・5層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 51（溝状）【第28図（64頁）／図版2】

《位置・確認》LB48・49、LC48グリッドに位置する。第IV層まで削平を受けており、第I層直下、第V層上位で確認した。確認面の標高は55.408mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.44m、短軸0.42m、確認面からの深さ1.20mである。底部は長軸4.12m、短軸0.22mである。長軸方向はN-61°-Eで、等高線に直交する。

《底面・壁》底面はグライ化する。長軸方向の南西端がやや高く、中央部に向かって緩やかに傾斜し、中央部から北東端にかけてはほぼ平坦である。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、開口部に向かって内傾している。短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。

《覆土》7層に分層した。1・5層は地山粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2～4・6・7層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 53（溝状）【第29図（65頁）／図版2】

《位置・確認》LC・LD47グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.720mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸2.26m、短軸0.44m、確認面からの深さ1.00mである。底部は長軸2.78m、短軸0.17mである。長軸方向はN-80°-Wで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面はほぼ平坦でグライ化している。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、開口部に向かって内傾している。短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かってやや外傾する。

《覆土》5層に分層した。1層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、2～5層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 56 (溝状)【第29図(65頁)／図版2・9】

《位置・確認》LE46・47グリッドに位置する。第V層下位で確認した。確認面の標高は55.677mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸4.04m、短軸0.42m、確認面からの深さ1.04mである。底部は長軸3.86m、短軸0.10mである。長軸方向はN-82°-Wで、等高線に直交する。

《底面・壁》底面は長軸方向の南端側がやや高く、若干の起伏がある北端側に緩やかに傾斜する。壁は長軸方向の両端とも開口部にほぼ垂直に向かっている。短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かって東端側は中位から外傾、西端側は底部付近からやや外傾する。

《覆土》4層に分層した。1層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2～4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 65 (溝状)【第30図(66頁)／図版2・8】

《位置・確認》LD48、LE48・49グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.463mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸4.00m、短軸0.50m、確認面からの深さ0.84mである。底部は長軸4.12m、短軸0.21mである。長軸方向はN-82°-Wで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面は中央部からやや東側で窪みがあるが、ほぼ平坦でグライ化する。壁は長軸方向の東端がオーバーハングし、西端がほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向ではほぼ垂直に中位まで立ち上がり、中位から開口部に向かってやや外傾する。

《覆土》4層に分層した。1・4層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2層は地山土塊を少量、3層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 67 (溝状)【第30図(66頁)／図版2・9】

《位置・確認》LF・LG51グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.310mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸4.08m、短軸0.24m、確認面からの深さ0.72mである。底部は長軸4.12m、短軸0.15mである。長軸方向はN-78°-Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面は中央部からやや西側で窪みがあるが、ほぼ平坦である。壁は長軸方向の西端が若干オーバーハングするが、両端ともほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かっている。短軸方向ではほぼ垂直に立ち上がる。

《覆 土》5層に分層した。1・2層は地山土粒を少量、5層は地山土粒・礫を多量に含む第IV層由来の自然堆積土、3・4層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 69 (溝状)【第31図 (67頁) / 図版2・9】

《位置・確認》KN43・44、K044グリッドに位置する。第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.616mである。

《重 複》なし。

《規模・平面形》開口部は長軸3.09m、短軸0.68m、確認面からの深さ1.02mである。底部は長軸3.52m、短軸0.14mである。長軸方向はN-35°-Wで、等高線に直交する。

《底面・壁》底面は起伏が少ないが長軸方向の両端部がやや高く、中央部に向かって緩やかに傾斜する。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、開口部に向かって内傾している。短軸方向では中位までほぼ垂直に立ち上がり、中位から開口部に向かって外傾する。

《覆 土》7層に分層した。1層は混入物をほとんど含まない、7層は地山土粒を多量に含む第IV層由来の自然堆積土、2～6層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

S K T 70 (溝状)【第31図 (67頁) / 図版2】

《位置・確認》KR・KS40グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は56.683mである。開口部東側の一部が攪乱されている。

《重 複》なし。

《規模・平面形》削平されていない底面と壁の形状から推定すると、開口部は長軸3.10m、短軸1.22m、確認面からの深さ1.51mである。底部は長軸3.48m、短軸0.15mである。長軸方向はN-88°-Eで、等高線に平行する。

《底面・壁》底面は起伏が少なくほぼ平坦である。長軸方向の両端がやや高い。壁は長軸方向の両端がオーバーハングし、西端は中位から開口部に向かってほぼ垂直である。短軸方向では北端がほぼ垂直に、南端がやや外傾して中位まで立ち上がり、中位から開口部に向かって大きく外傾する。

《覆 土》10層に分層した。1・5・7・10層は混入物をほとんど含まない第IV層由来の自然堆積土、2～4・6・8・9層は地山土塊を多量に含む壁面の崩落土と考えられる。4・5・8・9層は水分を多く含んでいる。

《出土遺物》なし。

(3) 焼土遺構

被熱面が第IV層内と第VI層上面にある2種類の焼土遺構に分類できる。第VI層上面に被熱面を持つ焼土遺構はSN08のみで、第IV層内の焼土遺構より古いと考えられる。第IV層内の焼土遺構は同一位置で縄文土器が出土することから、縄文時代に帰属すると推定される。また、いずれの焼土遺構にも掘り込みが認められず、周辺から柱穴等の付属施設を確認できなかったため、性格は不明である。また、近接する陥し穴との関連は不明である。

SN01【第32図(68頁)】

《位置・確認》LN65グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第IV層下位で確認した。確認面の標高は55.722mである。SN02・03と同一直線上にほぼ同じ間隔で並んでいるが、他の2つの焼土遺構より若干低い位置にある。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径(北西-南東)0.34m、短径(北東-南西)0.26mの不整な楕円形である。

《断面形》断面は確認面から4cmのほぼ均一の厚さで赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》単層の被熱面で、上面は硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

SN02【第32図(68頁)】

《位置・確認》LN64グリッドに位置する。SN01・03の周辺を精査中にその中間点の木の根の下の第IV層中位で確認した。確認面の標高は55.861mである。SN01・03と同一直線上にほぼ同じ間隔で並んでいるが、SN03とほぼ同一の高さにあり、SN01より若干高い位置にある。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径(北東-南西)0.40m、短径(北西-南東)0.22mの楕円形である。

《断面形》断面は確認面から4cmのほぼ均一の厚さで赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》単層の被熱面で、上面は硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

SN03【第32図(68頁)】

《位置・確認》L064グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第IV層中位で確認した。確認面の標高は55.924mである。SN01・02と同一直線上にほぼ同じ間隔で並んでいるが、SN02とほぼ同一の高さにあり、SN01より若干高い位置にある。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径(北東-南西)0.74m、短径(北西-南東)0.40mの楕円形である。

《断面形》断面は確認面から7cmのほぼ均一の厚さで赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》単層の被熱面で、上面は硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

S N04【第32図（68頁）／図版1】

《位置・確認》LL・LM63グリッドに位置する。確認調査で検出しており、当初は第IV層に形成されているものと思われたが、精査の結果、倒木痕の窪地中に形成されたものと判断した。確認面の標高は55.847mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（西－東）1.16m、短径（北－南）0.54mの不整形で、倒木痕の埋没過程におけるすり鉢状の窪地に北側開口部から底面にかけて被熱面が広がっている。被熱面の南側は掘り込みのため、消失している。

《断面形》断面はすり鉢状の底部が22cmでもっとも厚く、上部が8cmの厚さで赤変している。

《層序》断面C-Dは4層に分層した。1・2層は第IV層に対応する自然堆積土と推定される。3・4層はいずれも被熱面と考えられるが、3層の被熱面上面は硬く締まっている。断面A-Bの1層は断面C-Dの4層に対応する。

《出土遺物》なし。

S N08【第32図（68頁）】

《位置・確認》KQ51グリッドに位置する。第V層まで削平を受けており、第I層直下、第VI層上位で確認した。確認面の標高は55.820mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北西－南東）0.80m、短径（北東－南西）0.32mの楕円形である。

《断面形》断面は確認面から9cmの厚さで半円状に赤変している。被熱面は第VI層である。

《層序》単層の被熱面で、硬化面はなく、粘性がある。

《出土遺物》なし。

S N34【第33図（69頁）】

《位置・確認》LT51・52グリッドに位置する。焼土塊と炭化物の広がり第IV層下位で確認した。確認面の標高は55.894mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北東－南西）0.61m、短径（北西－南東）0.44mの不整形で、焼土とともに炭化材の碎片が多く検出された。炭化材は碎片になっているものの地中に斜めに差し込まれていた痕跡があった。おそらく杭状の木を地中に差し込んだ状態で火を焚いたものと考えられる。北西側を中心に攪乱されている。被熱面は第IV層内である。

《断面形》断面は確認面から最大10cmの厚さで赤変している。

《層序》2層に分層した。1層は2層の被熱面と炭化材の一部が攪乱され第IV層由来土が混入した層である。2層の被熱面はやや硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

SN37【第33図（69頁）】

《位置・確認》LR62グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第IV層で確認した。確認調査時に南側が削平されていた。確認面の標高は55.781mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（東－西）0.18m、短径（北－南）0.16mの不整形である。

《断面形》断面は確認面から6cmの厚さで赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》単層の被熱面で、上面は硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

SN73【第33図（69頁）】

《位置・確認》MG59グリッドに位置し、第IV層上位で確認した。確認面の標高は55.409mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北西－南東）0.41m、短径（北東－南西）0.28mの不整形である。

《断面形》断面は確認面から4cmの厚さで帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》単層の被熱面で、やや硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

SN77【第33図（69頁）】

《位置・確認》MA61グリッドに位置し、第IV層中位で確認した。確認面の標高は55.537mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北西－南東）0.64m、短径（北東－南西）0.40mの不整な楕円形である。

《断面形》断面は確認面から12cmの厚さで北西方向に下傾して帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》3層に分層した。各層の境は明瞭である。1・2層は焼土塊を含む第IV層由来土で、3層の被熱面が攪乱されたと考えられる。被熱面上面は硬く締まっている。

《出土遺物》なし。

2 西調査区

土坑1基、焼土遺構9基、柱穴様ピット6基を検出した。

(1) 土坑

土坑は1基のみで、帰属時期・性格は遺物が出土せず、周辺から関連する施設も確認できなかったため、不明である。

SK106【第34図（70頁）】

《位置・確認》OP51グリッドに位置し、第VI層上位で確認した。確認面の標高は54.001mである。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径0.84m、短径0.80mの略円形で、確認面からの深さは0.18mである。

《底面・壁》底面は東方向に緩やかに傾斜し、深くなる。周壁は西側と北東側が緩やかに、他は外傾し、立ち上がる。

《覆土》2層に分層した。1層は地山土粒を少量含む第IV層由来の自然堆積土、2層は地山土塊を多量含む壁面の崩落土と考えられる。

《出土遺物》なし。

(2) 焼土遺構

焼土遺構は沢状の窪地周辺に分布し、被熱面は第IV層内にあり、掘り込みは認められない。SN88中の炭化草本植物の放射性炭素年代測定により、弥生時代前期から中期の年代値が得られている(第5章第1節)。また、沢状の窪地周辺から弥生土器が出土している。花粉分析やプラント・オパール分析の結果からは草本植物等を大規模に焼いた痕跡であることが判明している(第5章第4・5節)。他の焼土遺構も検出状況が類似しており、弥生時代前期から中期に帰属すると推定される。周辺から柱穴等の付属施設を確認できなかった。性格は不明確である。

SN81【第34図(70頁)】

《位置・確認》NM57グリッドに位置する。第IV層中位で直径約6mの範囲に焼土塊が分布しているのを確認し、土層ベルトを設定して掘り下げ、土層ベルトより南東で被熱面を検出した。確認面の標高は54.721mである。同じ焼土塊の分布範囲で、SN82・85が検出され、ほぼ同時期のものと推定した。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径(北東-南西)1.10m、短径(北西-南東)0.82mの不整な楕円形である。

《断面形》断面は最大厚18cmで赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1層は焼土塊を含む第IV層由来土で、2層の被熱面が攪乱されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

SN82【第34図(70頁)】

《位置・確認》NL57グリッドに位置する。第IV層中位で直径約6mの範囲に焼土塊が分布しているのを確認し、土層ベルトを設定して掘り下げ、土層ベルトより南東で被熱面を検出した。確認面の標高は54.729mである。同じ焼土塊の分布範囲で、SN81・85が検出され、ほぼ同時期のものと推定した。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径(東-西)0.64m、短径(北-南)0.58mの楕円形である。

《断面形》断面は最大厚7cmで赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1層は焼土塊を含む第IV層由来土で、2層の被熱面が攪乱されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

SN85【第34図（70頁）】

《位置・確認》NL57・58グリッドに位置する。第IV層中位で直径約6mの範囲に焼土塊が分布しているのを確認し、土層ベルトを設定して掘り下げ、土層ベルトの位置で被熱面を検出した。確認面の標高は54.732mである。同じ焼土塊の分布範囲で、SN81・82が検出され、ほぼ同時期のものと推定した。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北—南）0.64m、短径（東—西）0.58mの不整な楕円形である。

《断面形》断面は最大厚7cmで半円形に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1層は焼土塊を含む第IV層由来土で、2層の被熱面が攪乱されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

SN86【第35図（71頁）／巻頭図版2／図版1】

《位置・確認》OJ44・45グリッドに位置する。焼土塊が点在する第IV層上位で確認した。確認面の標高は53.736mである。SN88と沢筋に帯状に連なっており、ほぼ同時のものと推定される。周囲は第IV層土が厚く堆積した水位の高い、沢状の窪地である。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（東—西）2.64m、短径（北—南）1.40mの不整形である。

《断面形》断面は確認面から最大厚9cmで帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1・2層はいずれも硬く締まった被熱面と考えられるが、2層はグライ化している。

《出土遺物》なし。

SN88【第35図（71頁）／巻頭図版2／図版1】

《位置・確認》OK45・46、OL45・46グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第IV層上位で確認した。確認面の標高は53.733mである。SN86と沢筋に帯状に連なっており、ほぼ同時のものと推定される。周囲は第IV層土が厚く堆積した水位の高い、沢状の窪地である。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北西—南東）4.92m、短径（北西—南東）1.56mの不整形である。

《断面形》断面は確認面から最大厚8cmで帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》断面C-Dは3層に分層した。SN88-1層は焼土塊・炭化物を多量に含む第IV層由来土である。SN88-2・3層はいずれも硬く締まった被熱面と考えられるが、3層はグライ化している。断面A-Bの1・2層はそれぞれ断面C-DのSN88-2・3層に対応する。

《出土遺物》なし。

S N91【第36図（72頁）／巻頭図版4／図版1】

《位置・確認》0I、0J52グリッドに位置する。確認調査で検出しており、第IV層中位で確認した。確認面の標高は53.998mである。同じ焼土塊の分布範囲でSN102・103が検出され、ほぼ同時のものと推定される。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北東－南西）0.96m、短径（北西－南東）0.74mの不整な長方形である。

《断面形》断面は確認面から最大厚16cmで帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1層は焼土塊を含む第IV層由来土で、2層の被熱面が攪乱されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

S N102【第36図（72頁）／図版1】

《位置・確認》0I53・54グリッドに位置する。焼土塊が点在する第IV層上位で確認した。確認面の標高は53.964mである。同じ焼土塊の分布範囲でSN91・103が検出され、ほぼ同時のものと推定される。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（東－西）1.96m、短径（北－南）1.28mの不整形である。

《断面形》断面は確認面から最大厚10cmで帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1層は焼土塊を含む第IV層由来土で、2層の被熱面が攪乱されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

S N103【第36図（72頁）／図版1】

《位置・確認》0I53、0J52・52グリッドに位置する。平面では焼土塊の一部として捉えていたが、SN91の断面A-Bの精査中に被熱面であることを確認した。確認面の標高は54.001mである。同じ焼土塊の分布範囲でSN91・102が検出され、ほぼ同時のものと推定される。

《重複》なし。

《規模・平面形》長径（北－南）1.08m、短径（東－西）0.92mの不整形である。

《断面形》断面は確認面から最大厚9cmで帯状に赤変している。被熱面は第IV層内である。

《層序》2層に分層した。1層は焼土塊を含む第IV層由来土で、2層の被熱面が攪乱されたと考えられる。

《出土遺物》なし。

(3) 柱穴様ピット

6基の柱穴様ピット（SKP93・94・96～99）を西調査区の中央部、沢状の窪地の第IV層のグライ化した面で確認し、検出した。これらのピット群には規則的な配列が認められず、遺物も伴わなかったため、帰属時期・性格は不明である。各柱穴様ピットの位置については第37図（73頁）を、ピット

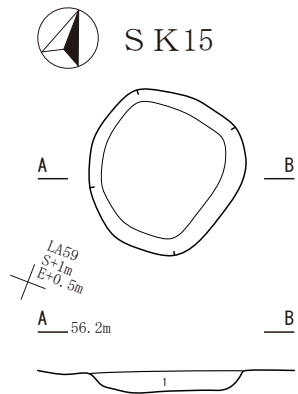
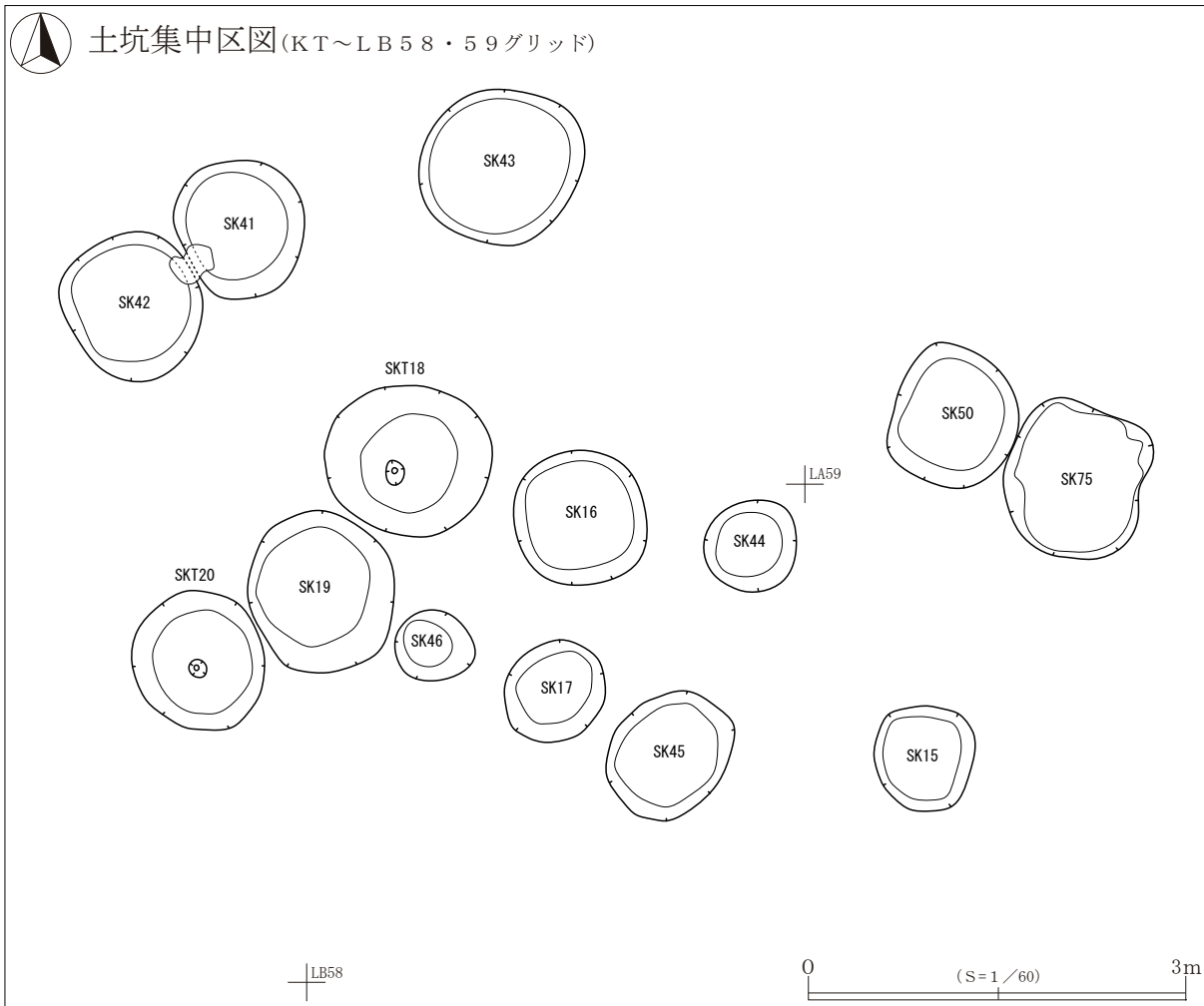
ト個々の規模、覆土等については、第2表（73頁）を参照して頂きたい。

3 出土遺物

今回の調査における出土遺物は、縄文土器が約240点、弥生土器が44点の中コンテナ（容量18^{リットル}）5箱分、石器が約400点の中コンテナ3箱分、平安時代、江戸時代の遺物が極少量である。遺構内遺物は各遺構の記述で触れているが、選別した遺構外出土遺物と合わせて、第3～6表（87頁～89頁）および第38～50図（74頁～86頁）・第51図（89頁）に掲載して報告とする。

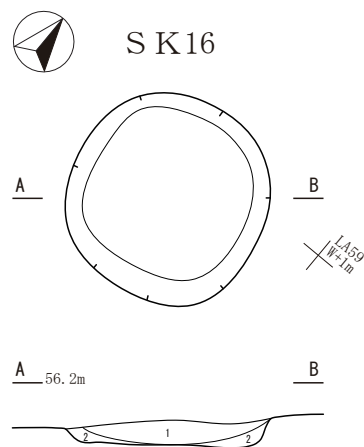
註1 青森教育委員会 『表館(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第120集 1988(昭和63)年
表館(1)遺跡Ⅲの報告書では、第X群土器が東北地方南部の大畑G式、日向前B式に類するもので、特に縦走縄文地に沈線文を施す手法のものは日向前B式との関連が強く、縄文時代早期末葉の土器群として位置づけられている。

東調査区



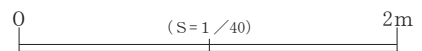
SK15

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 砂質シルト しまり強
粘性中 地山土粒(φ 1~10mm) 3%

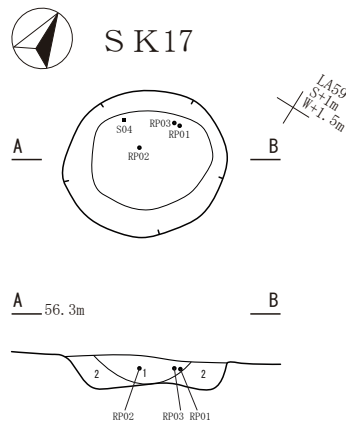


SK16

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり弱
粘性弱 地山土粒(φ 1mm) 1%
- 2 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中
粘性弱 地山土粒(φ 1~5mm) 1%



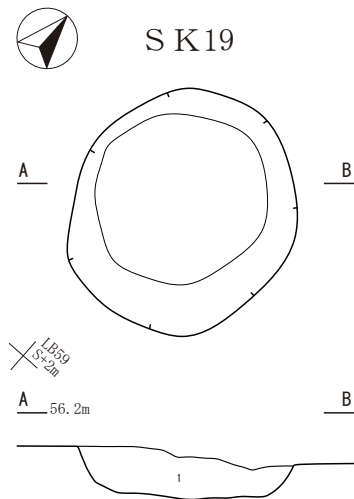
第12図 土坑集中区図 SK15・16



RP01・03[第38図1(74頁)/図版10]
RP02[第38図2(74頁)/図版10]

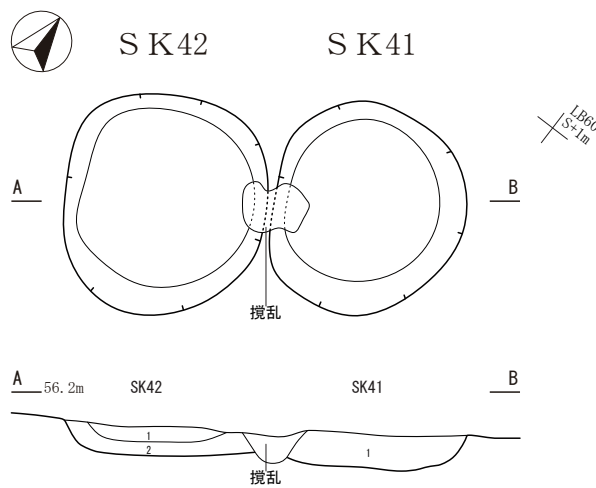
SK17

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 砂質シルト しまり強 粘性弱
焼土粒(φ 1mm)20% 炭化物(φ 1~5mm) 1%
- 2 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中 粘性中
地山土粒(φ 1~10mm) 5%



SK19

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 砂質シルト しまり強
粘性弱 地山土粒(φ 1~5mm) 1%

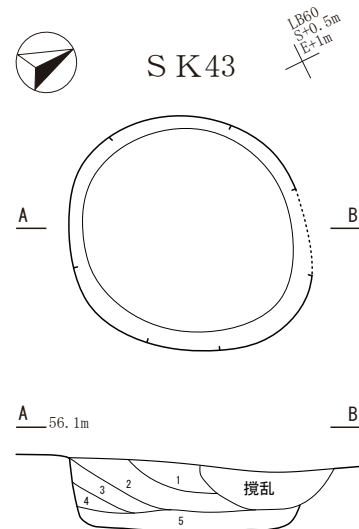


SK41

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 砂質シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 1%

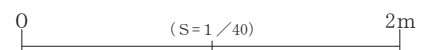
SK42

- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1mm) 1% 焼土粒(φ 1mm) 1%
- 2 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 1% 礫(φ 1~10mm) 1%

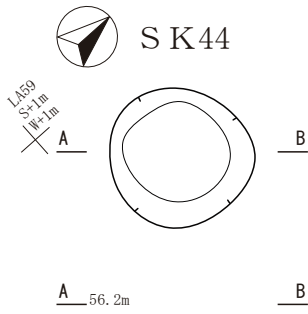


SK43

- 1 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 1%
- 2 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 3%
- 3 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 3%
- 4 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 1%
- 5 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1mm) 1% 礫(φ 5mm) 1%

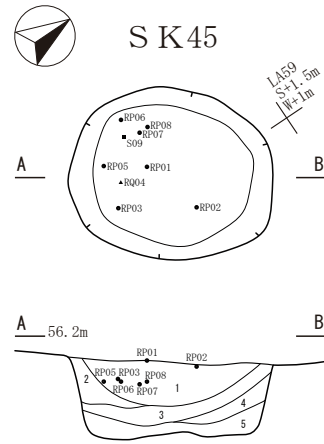


第13図 SK17・19・41・42・43



SK44

- 1 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり強
粘性弱 地山土粒(φ 1~5mm) 1%



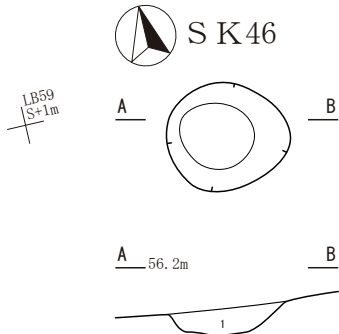
RP01 [第38図3 (74頁)/図版10]

RP02 [第38図4 (74頁)/図版10]

RP03~RP05~08 [第38図5 (74頁)/図版10]

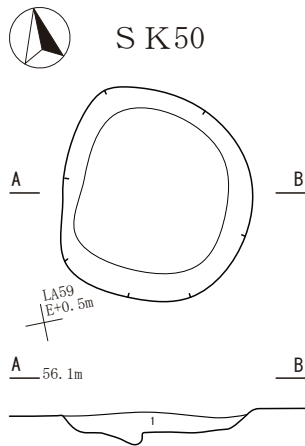
SK45

- 1 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 3% 砂(φ 1mm) 1%
- 2 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性弱
地山土塊(φ 1~30mm) 50% 砂(φ 1mm) 1%
- 3 暗褐色土(10YR3/4) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 1% 砂(φ 1mm) 1%
- 4 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性弱
地山土塊(φ 1~30mm) 40%
- 5 暗褐色土(10YR3/4) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~5mm) 3% 礫(φ 1~5mm) 1%



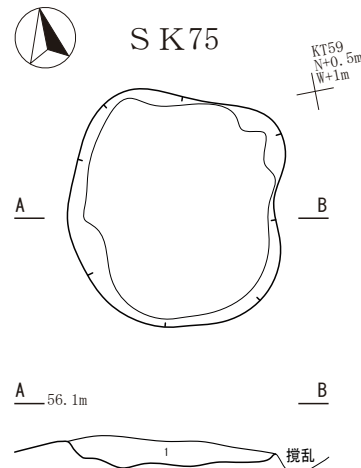
SK46

- 1 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり中
粘性弱 地山土塊(φ 1~30mm) 10%
礫(φ 1~5mm) 1%



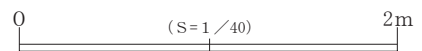
SK50

- 1 暗褐色土(10YR3/4) シルト しまり強
粘性弱 炭化物(φ 1~5mm) 1%
礫(φ 1~5mm) 1%

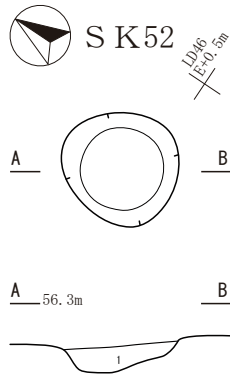


SK75

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 砂質シルト しまり強
粘性中 地山土粒(φ 5~10mm) 3%

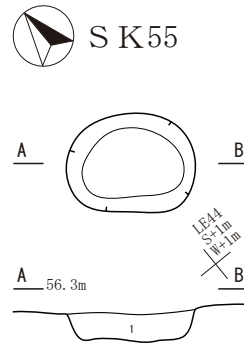


第14図 SK44・45・46・50・75



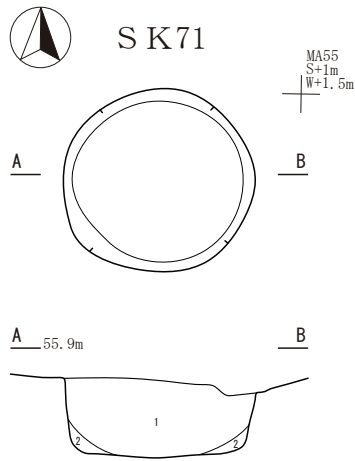
SK52

- 1 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 粘性弱
地山土粒(φ 1~10mm) 1%



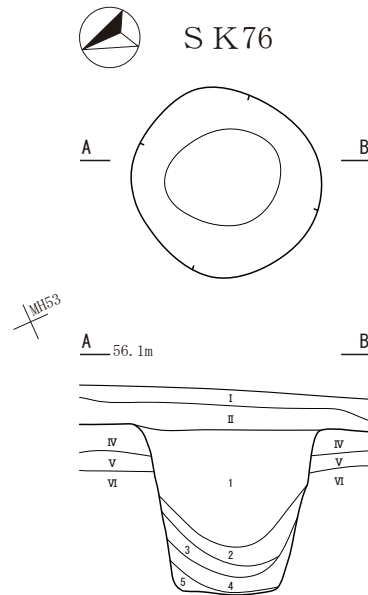
SK55

- 1 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 粘性弱
地山土塊(φ 1~30mm) 3%



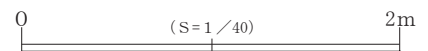
SK71

- 1 黒色土(10YR1.7/1) シルト しまり中 粘性中
地山土粒(φ 2~3mm) 1%
2 黄褐色土(10YR5/6) シルト しまり強 粘性中
黒色土(φ 100mm) 15%

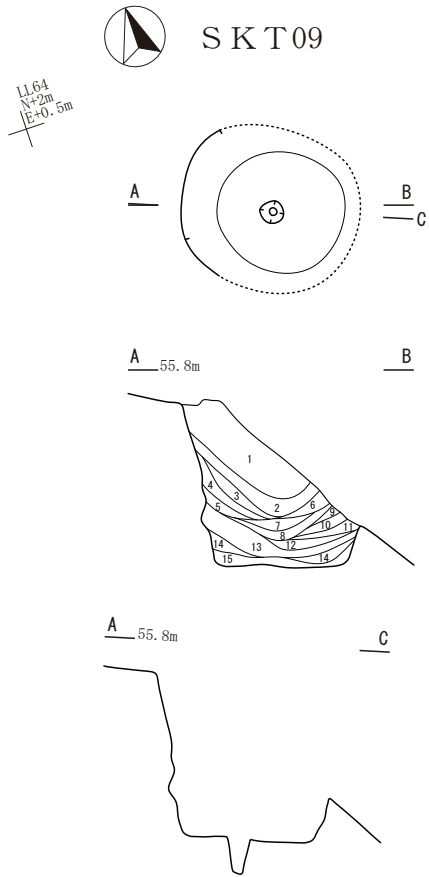


SK76

- 1 黒褐色土(2.5Y3/1) シルト しまり中 粘性中
地山土粒(φ 1~5mm) 3%
2 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり強 粘性中
地山土粒(φ 1~10mm) 5%
3 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり強 粘性中
地山土粒(φ 1~10mm) 10%
4 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり強 粘性中
地山土粒(φ 1~10mm) 30%
5 黒褐色土(2.5Y3/1) シルト しまり中 粘性中
地山土粒(φ 1mm) 1%



第15図 SK52・55・71・76

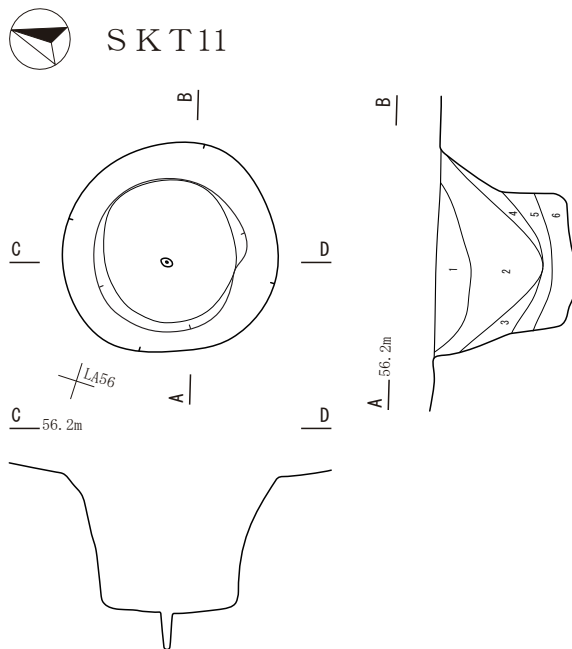


SKT09

- 1 黒色土(10YR2/1) シルト しまり強 粘性中
礫(φ 1~5mm) 5%
- 2 黒色土(10YR1.7/1) シルト しまり強 粘性中
- 3 黒色土(10YR2/1) シルト しまり強~中 粘性中
地山土粒(φ 5~10mm) 5%
- 4 黒色土(10YR2/1) シルト しまり強 粘性中
地山土粒(φ 5~10mm) 3%
- 5 黄褐色土(10YR5/6) 砂質シルト しまり強~中
粘性弱 黒色土(φ 30~50mm)20%
- 6 黄褐色土(10YR5/6) 砂質シルト しまり強~中
粘性弱 黒色土(φ 30~50mm) 5%
- 7 黒色土(10YR2/1) シルト しまり強 粘性中
地山土粒(φ 5mm) 3% 砂微量
- 8 黒色土(10YR1.7/1) シルト しまり中 粘性中
- 9 黄褐色土(10YR5/6) 砂質シルト しまり強~中
粘性弱 黒色土(φ 5~10mm) 3%
- 10 黒褐色土(10YR3/2) 砂質シルト しまり強 粘性中
地山土粒(φ 5~10mm) 1% 礫(φ 1~5mm)微量
- 11 黒色土(10YR2/1) シルト しまり強~中 粘性中
地山土粒(φ 5~10mm) 3% 砂微量
- 12 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり強~中 粘性中
地山土粒(φ 5mm) 3% 砂微量
- 13 黒色土(10YR2/1) シルト しまり中 粘性中
地山土塊(φ 5~30mm)10% 砂微量
- 14 黄褐色土(10YR5/6) 砂質シルト しまり強~中
粘性強~中 黒色土(φ 5~30mm) 5%
- 15 黒色土(10YR1.7/1) シルト しまり強~中 粘性中

杭穴

黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中 粘性中
地山土粒(φ 5mm) 3%

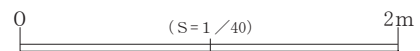


SKT11

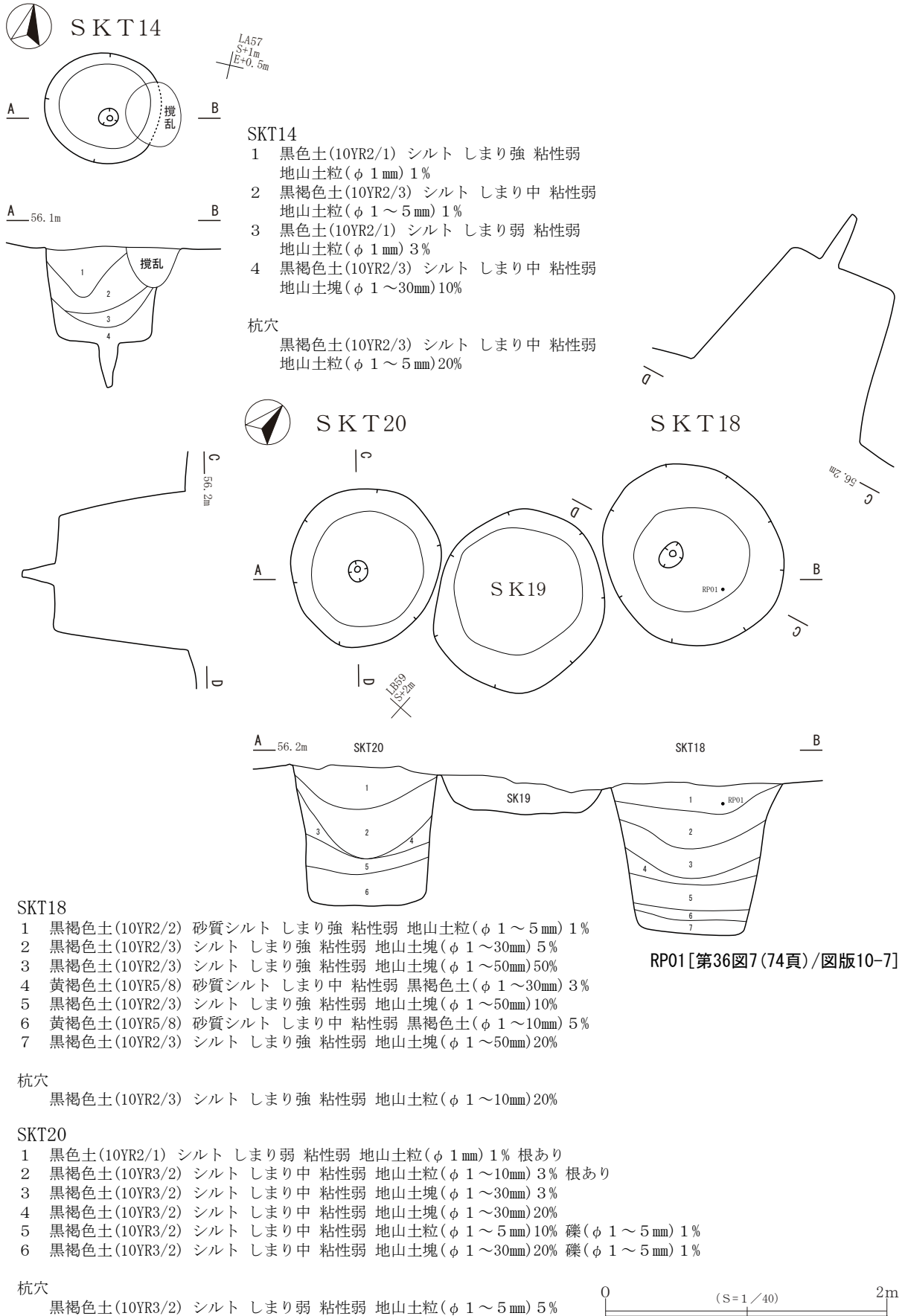
- 1 黒褐色土(10YR2/2) シルト しまり強
粘性弱 地山土粒(φ 1mm) 1%
- 2 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中
粘性弱 地山土粒(φ 1~10mm) 3%
- 3 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり強
粘性弱 地山土粒(φ 1mm) 1%
- 4 黒褐色土(10YR3/2) シルト しまり中
粘性弱 地山土粒(φ 1mm) 1%
焼土粒(φ 1mm) 1%
- 5 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中
粘性弱 地山土塊(φ 1~100mm)30%
- 6 黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中
粘性弱 地山土塊(φ 1~30mm)10%

杭穴

黒褐色土(10YR2/3) シルト しまり中
粘性弱 地山土粒(φ 1~5mm) 5%



第16図 SKT09・11



第 17 図 SKT14・18・20